三瑞だより

令和５年度　　１１月号
荒川区立第三瑞光小学校
校　長　水野　美津子
発行　令和５年１１月１日

探究心の種をまく

副校長　竹下　佳余

日中の気温が２５℃を超える日がようやくなくなり、青空に高くたなびく雲と校庭の木々の色づきの様に、秋本番を実感する頃となりました。収穫を祝うお祭りの話題や「食欲の秋」「読書の秋」「スポーツの秋」といったフレーズにも、この季節ならではの感動を味わうことができます。

工藤直子さんの詩『あきになると』の出だしに「秋になると　木の実は　うれしくなる　いちばん　いい様子をして」とあります。幾日かの時を経て成熟した木の実の艶やかさと味わいが想像されます。また、この作品の結び、「そして自分から　ひかりはじめる」からは、何かを成し遂げたものの自信と今後を見据えて一歩前に踏み出す気持ちが感じられます。そして、同時に、先日行われた連合運動会で精一杯力を出し切った６年生の姿が頭に浮かんできました。日常の体育の授業はもちろん、残暑厳しい中でも練習を積み重ねていた姿と、当日自分の種目にも応援にも熱が入っていた様子に、輝きを感じたからです。

確かな収穫を得るには種まきの時期が大切です。主体的に物事を探究しながら学ぶプロセスでは、課題設定の場面がその時期に当たります。自ら課題意識をもつことが、その後の学習のモチベーションに大きく関わるため、本校でも、課題意識を高める場面では、人、社会、自然等の対象に直接触れる体験活動を位置付けています。先月の学校公開週間でも、妖怪教室や法の教育等いくつかの授業を参観いただきました。本物と直接出会う授業の意義は、木の幹や葉をじっくり見て新たな発見を得たり、講師の方々のお話や技術に憧れや可能性を感じたりすることだと言われています。

４年生の「車いす体験」の一幕です。「着替えはどのようにするのですか」「スポーツはしますか」次々出される質問の中に「もしぼくが車いす生活になったらまず何が必要ですか」とうものがありました。みなさんは、この問いの答えをどのように予想したでしょうか。講師の後藤さんと緒方さんは、「車いす生活になった自分を受け入れること」と二人そろっておっしゃいました。子供たちも私も全く予想していない答えに驚きましたが、その場が「もっと話を聞きたい」という雰囲気になったことは間違いありません。このように、これまで考えていたことに「ずれ」や「隔たり」を感じさせることも重要です。私たち教師は、体験活動の中で見られた子供たちの感動を見逃さず、それを価値付け、探究活動の原動力となるよう種をまいていきたいと考えています。

劇団風の子ワークショップの講師大澗さんは、学芸会を前にした子供たちに「思いを声に出して表現することの楽しさ」という種をまいてくださいました。それを受けて、今子供たちは、どのように演じたらお客さんに感動してもらえるかを探究しながら日々の練習に励んでいます。お家の方々が、応援や励ましのプラスのシャワーをかけてくださると、より大きな花が咲くことと思います。今月もどうぞよろしくお願いします。

１１月の目標

生活目標……進んで働こう
保健目標……正しい姿勢をしよう

給食目標……感謝して食べよう